

## 最優秀賞『君たちはどう生きるか』

村中 美友

『君たちはどう生きるか』この本は 1962 年に出版された吉野源三郎の著作である。現在、漫画での再販をきっかけに改めて注目されている。主人公は中学生のコペル君こと、本田潤一君。多感で繊細で日々成長途中にある中学生のコペル君が日常の体験の中で疑問に思ったこと、気づいたこと、悩みを叔父さんに話し、叔父さんは回答をノートに綴る。叔父さんとのノートのやりとりの中で、少しずつ、しかし確実に成長していくコペル君に自分自身を重ねて共感したり学んだりしながら、今の自分自身を省み、そして励まされる一冊だ。

コペル君が、デパートの屋上で「人が分子のようにちっぽけだ」と俯瞰的に物事を見るということを知った時、自分を中心に世界が回っていると思う子ども時代を終えたのだと思った。最近では大人でも「自分」が大切すぎて、この俯瞰的な視点を持たない人も多いのではないか。自分自身もこのちっぽけな分子の一つだと考えられるのか、世界は人間同士が関係しあって生きているということを認識できるかどうか成長の第一歩ではないかと思う。

そしてコペル君は学校でも「立派な」友人たちを得ることができた。心無いあだ名を付けられいじめに合う豆腐屋の浦川君は、自分を助けるためにいじめっ子に殴りかかろうとする「ガッチン」こと北見君を制止する。痛みを知っているからこそ、相手の痛みをまるで自分のことのように受け止める優しさ。そして豆腐屋を支えるお金を工面するために不在となった父親の代わりに、学校を休んで家族を支え、懸命に働く力強さ。コペル君はそんな浦川君を「立派な人」だと尊敬し、友人となる。立場や境遇で人間を分けて色眼鏡で見ると軽んじたり、蔑んだりすることがいかに愚かなことであるかを考えさせられる。

上級生に目を付けられた北見君をみんなで守ろうと約束したのに、実際に行動に移せなかったことを悔やみ、合わせる顔がないととても悩み、病気になってしまうコペル君に叔父さんは「自分のしたことに対し、どこまでも責任を負う」ことの大切さを話す。またお母さんも後悔という経験が人間の成長に重要なことを話した。コペル君は、人生で最大の

後悔をし、大切なことを学んだ。また一つ、亡くなったお父さんが望む「立派な人」に近づく。そして叔父さんは、「人間の不幸や苦痛、自分で自分について決定する力」について熱くノートに書き綴る。覚悟を決めて謝罪したコペル君は大切な三人の友人との友情を取り戻した。庭に咲く水仙の姿や仏教文化の話、コペル君が俯瞰するものは、どんどん深く、そして広がっていく。そして今度は自らが叔父さんへ向けて綴るノートの最初には「いい人間にならなければいけない」「僕にもできる」という前向きな言葉が書かれた。

近年、自己中心的で周りを見ることができず、今の状況が自分の望む 100% でないだけに、ことさらに不幸と感じて嘆き、自分の行動や思考を改めることができない大人が増える混乱した状況が、実際の社会にも SNS 上にも広がっている。自分の身近に置き換えても、経済的な格差、職業、性別、学校ではスクールカーストという言葉さえあるように、その人自身がどういう人か中身は関係なく、見た目から自分の物差しで判断する。このような人が多い環境では、いじめや差別が起きやすいし、なくならないだろう。叔父さんは「世間の目よりも何よりも、君自身がまず人間の立派さがどこにあるか、それを本当の君の魂で知ることだ」と熱く述べるのが印象深い。「魂で知る」ためには、どんな人とも、心を開き一人ひとりとのコミュニケーションを大切にすることが大切だ。そして自分を世界の中心に置かないこと。デパートの屋上でのコペル君の気づきのように、人と人とはつながって世界に生きていることを知ることが第一歩なのだ。そうやって魂で結んだ絆や信頼は、責任を持って大切にすること。コペル君の失敗や苦悩に自分を重ねていけば、「私はどう生きるか」に気づくことができるのだ。

コペル君や叔父さんのように考えられる人がほとんどいない現代社会。だからこそ今、この物語が必要であり、求められ、受け入れられているのだ。自分というこの小さな分子の一つが、誰かのために責任を持って何かをする。できればそれが実際に形になり、遠い誰かの幸せになればいい。そういうふうには一人ひとりが考えられれば、きっとみんなが暮らしやすく幸せになる。そんな世の中がやってくるかもしれない。私には叔父さんのようなノートの宛先が今はない。でも、迷ったり悩んだり、自分を振り返り諫めたくなる瞬間にはまた、この本を読み返してみよう。

さて、私はどんな「いい人間」、「立派な人」になれるだろうか。私は私のノートの1ページ目を書き始めたばかりである。